# 響裕也の幻想物語

空影晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
響裕也の幻想物語

【Ｎコード】
Ｎ４２６２Ｒ

【作者名】
空影晃

【あらすじ】
この物語はある高校生のファンタジー世界の体験を綴ったフィクションである。主人公、響裕也は現実世界と、そことはまた違う世界を行き来する旅行者。彼が行く世界には一体何が待ち受けているのだろうか。
＊短編連作の予定。それと不定期更新です.

## はじめに（前書き）

ちょっといくつか説明書きを入れておきます。

## はじめに

この小説は短編連作となっています。大学の長期休みで更新をする予定となっていますのでご了承ください。
詳しい説明は以下の通りです。
ｅｐ：基本４話で１つの話となっています。
２・３月と８・９月でｅｐ１つ分を更新する予定です。
ｓｓ：１話で１つの話となっています。
平日だろうが、きままに更新したいときに書くと思います。
ｅｘ：小説の設定について、ストーリーで触れられないけど、重要な説明を載せています。
質問やストーリー作成時に必要だと感じたら作成します。

＊ｓｓとｅｘは現在未制作。

## はじめに（後書き）

随時説明を追加していくと思います。

## プロローグ（前書き）

あまりに短かったので、プロローグ１（３／６投稿分）とプロローグ２を組み合わせています。その跡地が「はじめに」であるという。

# プロローグ

春の昼下がりの午後の授業中、日差しが窓から差し込んでいた。居眠りするにはちょうどいいぐらいだ。このまま寝てしまえ。

でも、そういう場合には邪魔が入るのも付きものである。

「こら、響。寝るな」

「はぁーい」

正確にはまだ寝ていない、という言い訳は意味がないだろう。僕はやる気のない返事をする。先生はその返事に納得がいかない顔をしていたが、授業を優先してかそのまま立ち去った。

さて、居眠り作戦が潰れた今、素直に授業を受けるしかない。だから、授業を一応聞くことにする。だけど、初めからやる気などないので、集中なんて続くはずがない訳で。

授業を聞くのが退屈になり、ふと窓に目を遣った。その窓の外の壁の上には青色の猫が歩いていた。

「はぁ」

思わずため息を吐く。

「響、どうしたんだ？」

先生が僕のその様子を不審がり話しかけてきた。少しまずいかも。

「窓の外に何かいるのか」

先生もそちらを見る。そして、こう告げる。

「何だ、何も居ないじゃないか」

その言葉を聞いて内心ほっとした。

「いえ、大したことではないんですよ。ただ、絶好の居眠り日和なのに、なぜ授業という形で先生のつまらない話なんて聞かなきゃいけないんだろうと、この世の無情さを感じただけで……」

「響、お前の言いたいことは良く分かった。放課後、職員室な」

やばい、地雷踏んでしまった。

「はぁ」

先生が行った後、二度目のため息を吐く。つい本音を漏らしてしまうとは。
僕は窓の方を見て、青い猫の方に目を向ける。
（お前のせいだぞ）
そんな僕の思いを知るはずもなく、その猫はのんびりと歩いていた。
（仕方がないよな）
僕は結局その時間中、その猫の方を見ていた。この後にある恐怖から目をそらすようにして。

放課後、予想通りというか、予定通りというか、職員室で先生の雷が落ちた。とりあえず真剣に謝る（ふり）をして何とか解放された。
校門の外を出ると、例の青色の猫がいた。
「裕也、遅かったね」
この言葉の主はその猫である。僕はその猫についてくるように手で合図して、人気が少ない路地へと移動した。
「何勝手に出歩いてるんだ。おかげで授業に集中できず、先生に怒られたんだよ」
僕の失言のせいでもあるということはあえて黙っておこう。
「そうなの、ごめん。でも、裕也は心配性だよ。大丈夫、ボクたちは普通の人には見えないから」
青の猫はこう告げたのであった。
「念のため、ということを考慮してほしかったんだけど」
まぁ、いいや、そう告げて僕は青く透き通った石を掲げる。
「帰るよ、ミスト。続きは後で」
そして、ミスト――この青い猫――は青い光を発して消え、その光は石の中へと吸い込まれていった。

現在、僕の住みかは学生僚となっている。学校まで徒歩五分程で、

寝坊しても十分授業に間に合うような場所である。……もちろん授業開始前に起きられれば、という訳だが。
僕は古びた階段を三階までかけ上がり、自分の部屋へとたどり着く。
「ただいまっと」
一人部屋なので誰もいないんだけど、挨拶は忘れない。習慣でもあるが、時々いる訳だし、ミストとか。
手洗いうがいを済ませ、冷蔵庫からお茶を取りだしてコップに注ぐ。そして、適当にお菓子の袋をあける。
「と、忘れる前に」
僕はそう言って、青色の石と緑色の石を掲げた。そして、中からミストと緑色の鷹が現れた。
「ふー、やっと出られたぜ」
緑色の鷹は机の上に飛び下り、そして床の上に座り込んだミストの方を向く。
「それにしてもザマァねえな、ミスト。勝手に飛び出して叱られるなんて。ちょっとは品行方正なオレを……」
「ウィン、君だって前に勝手に飛び出して、その上騒ぎを起こしたじゃんか」
僕を無視して、言い合いを始めようとする二匹。
「二人ともそこでストップ。ミスト、とりあえずさっきの続きといこうか」

青色の猫のミスト、緑色の鷹のウィン、彼らは言うまでもなく世間では知られていない生物。
彼らの体は魔力によってできており、ゆえに魔力を感じ取れない人には見ることすらできない。とはいえ、霊力者とか、ごくたまにそういうのを感知できる人もいる。だから出歩くのは自重してほしい訳なのだが。
「一日中じっとしてろ、というのも無茶なのは分かるんだけどね。

せめて家で待機とか、色々方法はあるだろ」
　ただの魔力ではなく、彼らは明らかに自分の意志を持っている。魔力でできた生物ともいえるし、意志を持った魔力が生物の形をかたどったとも言えるだろう。なので、じっとしているのが嫌なのは分かるんだけど、それで面倒に巻き込まれるのは困る。
「ごめん。でも、裕也とも一緒にいたいし……」
　彼らの特徴について、もう一つ挙げるべきことがある。それは人間と契約して、使役される存在というものである。僕も契約しているうちの一人で、普段は先ほどから使っていた魔力を持った石である、魔法石の中に入れている。その中に入っていれば、外からは分からないからである。
　僕達の間では、意志を持った魔力を精霊と言う。そして、精霊の中でも生物の形を取るもの、それらを精霊獣と言う。
「分かった、分かった。これ以上言っても堂々巡りになるから止めよう。けど、せめて一言ぐらいは言ってよね」
「うん、分かった。今度から気を付けるね」
　ミストが申し訳なさそうに頭を下げる。尻尾も先ほどから垂れ下がったままだ。
「ちょっと待て！　オレのときはあんなに言っただろうが。贔屓だ！」
「悪気があるかどうかってのは、重要なポイントだよねー」
　緑の鷹が何か言っているが、（無視を決め込んでいる）僕には聞こえない。

　さて、そんな彼らと契約しているような僕も普通の人とは言えないだろう。
「じゃ、今後の予定を話し合っておこうか」
　実は、異世界に行き来している旅人――僕らのうちではゲートトラベラーと呼ぶ――だったりする。
「あ、今日が金曜日だっけ」

「うん、そうだよ」
ちょっとしたきっかけでこことは異なる世界に行って以来、度々出かけている。もちろん、高校生である以上、休日を利用してというぐらいに留めているが。
「よーし、久々に暴れるぜ！」
「ほどほどにしといてね」
僕達はおかしをつまみながら、今日から三日間の予定を決めていく。
「とりあえず、まずはギルドの方に行くとして」
「今回は三日間でできそうなものあるかな？」
「宿題があるんで、早めに帰れるのがいいんだけど」
「何にせよ、まずは行ってみないとな」
「なかった場合だけど、この前行った魔法石の採掘所でいい？」
「ボクは構わないよ」
「オレもいいぜ」
「じゃ、決定」
そう言うと、僕は制服から旅用の衣装に着替えた。水色のシャツとズボン、そして青色のマントを羽織る。
「準備完了。行くよ！」
僕は奥の壁に欠けている擬装用の布を取り外す。そこには魔法陣が描かれている。
「開け異界の扉よ。我等が望む地へと道を繋げ」
そして、その魔法陣から光が発され、僕らはその中へと吸い込まれていった。

## プロローグ（後書き）

次でｅｐ１に入ります（といっても実質プロローグも一部ですが）。

## ｅｐ１魔法研究員の贈り物－１（前書き）

響裕也はこちらの世界ではユウヤ＝ヒビキ。漢字文化圏でないので。

## ｅｐ1魔法研究員の贈り物－1

魔法陣の光の向こうに着くと、そこは古びた木造の小屋の中である。こちらでの僕の活動拠点である。

とはいえ、ここにいることはあまりない。大きな仕事の際に話し合いに使ったり、たまに知り合いが訪ねてきたりするぐらいである。ここを事務所とかにしていたら別なのだが、常駐している訳ではないので、それをすることはできない。

「さてと、どこに置いていたっけ」

という訳で、基本的には武器とかあちらに置いておけないようなものの置き場として使っている。現在はとある忘れものを探しているのだが。

「うーん、見つからないなー」

布団が置いてある部屋の方を探していたミストの声が聞こえる。僕は居間を、ウィンは物置となっている屋根裏の方を探している。

「裕也、あったぜ」

ウィンが翼で青いペンダントを投げつける。

「サンキュー」

僕はキャッチしてそれを首にかける。

ペンダントは翼を持つ龍の形をしている。繊細できれいな線が彫られており、一流の職人が作ったものと遜色しないようなできである。また丈夫であり、少なくともこれが欠けるようなことは一度もない。

実はこのペンダントにはとある秘密があるのだが、それはまた後で説明することにしよう。

「ったく置き忘れるなよ」

「ごめん、ごめん。ちょっと本を見ていたときにはずして、ついそのままにしちゃって」

怒るウィンに、僕は笑って謝る。

「とりあえず、これで準備ＯＫだね。後は必要なものを揃えて出発しよ」
ミストがにこやかにほほ笑みながら話す。ウィンと違って、こちらは単純に見つかって喜んでいるみたいだ。
「そうだぜ。オレ達はあんな狭いところに居て窮屈だったんだからな」
今回はウィンの言い分ももっともなことだろう。
そうして、僕達は必要なものを整えて近くにある街の方へと向かうことにした。

街に着いた僕達はギルドに一直線に向かう。
この街は商業都市で、また、門でのチェックも軽くすむ。そのため、商人や旅人はもちろん、賞金稼ぎや犯罪者もよく入り込んでくる。良くも悪くも、人が集まり活気のあるという訳だ。
そういう訳で、冒険者ギルドも賑わっており、僕もお世話になっている。
「さてと、着いたな」
ここのギルドは酒場を兼ねている。バーに注文してから、どのような依頼があるか、リストを確認するのが通例だ。国や領主からの依頼ならば、玄関から向かって正面の掲示板に載ることもあるが、その場合、賞金首や特別な遺跡の調査、護衛の仕事などが主で、長期に渡ることが多いので、僕はあまり活用していない。
また、店には冒険者やバーテンダー、ギルドの役員以外にも、ギルド公認の情報屋もいる。そして、この世界では賞金首も冒険者ギルドが取り扱っており、そのため賞金稼ぎも来ている。
僕はそのまま直進してバーの方へ向かう。
「ミルクお願い」
「あいよ」
別に未成年の禁酒は決まっていないのだが、一応自重している。というか一度勢いで飲んだことあるけど、普通に酔いつぶれたから

な。うん、大人になるまでやめておこう。
「それと、これはユウヤに来ている依頼だ。渡して置くぜ」
「ありがとう」
そう言ってバーテンダーから一枚の紙を受け取る。僕の場合、常にこの世界に居る訳ではないので、ギルドの方に預かってもらっている。僕に限らず、他の世界に住居を置いている人の場合、ギルドに預かってもらうことが多い。
「で、どんな依頼だ、裕也」
逸るウィンが確認してくる。なお、こちらの世界では精霊獣の存在は当然で見えない人の方が少ない。なので、当然彼らを魔法石から出している。
「ちょっと待って。えっとライグスシティの魔法研究所の研究員からの依頼みたいだ」
「魔法研究所からの依頼？」
ミストが不審そうに聞いてくる。研究所によっては、ドラゴンの牙が欲しいとか、カーバンクルを捕まえてこいとか、厄介な依頼の場合があるからだ。
「この前知り合ったタリス研究員からだよ。個人的な贈り物で、送り先はアライアス地方のレクス研究所だって」
タリスさんはたまたま魔法石の採掘所で知り合った人で、何か頼みたいことができたら、依頼の手紙を送るって言っていたっけ。
「アライアスのメインゲートへの移動呪文は知っているし、今日研究所行って、明日ゲートを通じて行けば、レクス研究所まで一日あれば充分かな」
ウィンがその言葉を聞いてニヤリとする。
「じゃ、決定だな」
僕も笑って言葉を返す。
「うん。そうだね」
僕はバーテンダーに情報料としてのお金を渡し、ギルドを出た。

研究所に行って、事務員にタリス研究員の呼び出しを頼む。
夕暮れの中、外のベンチで待つこと十数分、タリス研究員がやってきた。
「ユウヤ君良く来てくれたね」
タリス研究員は茶髪緑目で穏やかな雰囲気の人である。年も若く、研究員としてはそこそこの業績も挙げているらしい。
「で、依頼についてなんですが」
「ああ、これをレクス研究所のリーサ研究員に渡してほしいんだ」
そう言って手のひらサイズの橙色の魔法石を僕に渡した。魔法石には、何か紋様が浮かんでいた。魔法を入力してあるのだろう。橙色ということは、おそらく木属性といったところか。
「了解しました」
「あの採掘所での見せてくれた腕前があれば大丈夫だろ。ちょっとばかし厄介なところだけど、頼むね」
「はい」
その日はすでに暗くなりつつあったので、近くに宿を取り、そこで夜を過ごした。

## ｅｐ1魔法研究員の贈り物－１（後書き）

ペンダントの秘密は次回出す予定です。この小説ではあまり伏線を張ることもないはず。（だって短編集予定だから）

## ep1－2（前書き）

２か月空けてしまった……。すみません、とりあえずできるだけ早めにｅｐ1を終わらせるように努めます。

## ep1－2

夜が明けて僕達は一度例の小屋に戻った。研究所のゲートを使えれば楽にアライエス地方に行けるんだけど、今回は一研究員の依頼であるため使用許可が下りるのに時間が掛かることになるだろう。なので、小屋の魔法陣から向かうことにした。

「さてと、では行くとするか」

僕は魔法陣の前に立つ。

「開け光の扉よ。険しき山々が広がる彼の地――アライエス――へと道を繋げ。」

魔法陣から溢れ出る光に僕らは飛び込む。光の先には大きな扉があり、そこをくぐると、簡易な検閲所に出た。勿論そこには門番もいる。

「あ、これが許可書です」

僕はそう言って門番に一枚のカードを見せた。

「ユウヤ・ヒビキさんですね。少しお待ちください」

検閲が済み、僕は料金を支払って出る。

この世界では移動呪文が施されたゲートと呼ばれる扉が各地に存在し、長距離移動の場合、それが主な移動手段となる。とはいえ、犯罪者や他国の軍隊が好き放題移動されては困るので、国家がこのような検閲所が設けられたり、一度に行けるのは数人程度だったりと、対策が取られているのである。

まぁ、何事も例外はある訳で、僕が使用している魔法陣のように個人が所有しているものもあるし、国家内の移動の場合、大規模なものが用意されて場合もある。

検閲所を出て北へ十数分ほど歩くと、山岳地帯へと出た。ここを越えればレクス研究所がある。だが、この一帯は見晴らし代わり場所が続くと聞いている。そして、ここら一帯を拠点としている山賊もいるという話だ。

「気にしても仕方がないな。ミスト、ウィン行くよ」
そして、二匹に魔力を与えた。何があってもすぐに対応できるように。

「石ばかりで歩きづらいな。舗装までは望まないけど、できるだけ平坦なほうが楽なんだけど」
「まぁ、仕方ないよ。アライアスだし」
そこらに散らばっている石や起伏ででこぼこしているため、歩きにくくしている僕に対して、ミストはすいすい歩いていく。一方、ウィンは僕の肩に乗って暇そうにしている。
「それにしても面倒な場所だな」
周囲は荒地で木こそないが、起伏にとんだ地形で、岩がごろごろ転がっている。聞いている通り厄介な場所だ。地図によると、崖に挟まれた場所や、吊橋を通らないといけない所もあるとか。
ひとまず山賊の姿は見ていない。できるだけ楽に行けるのに越したことはないが。
「そこの少年、身包みを置いていってもらおうか」
やっぱり出た。
現れた男は黒ずんだ鉄の鎧を着ており、腰には剣を差しているのが見える。傭兵崩れといったところか。さて、どう「対処」するか。

「悪いけど、お断りします」
僕は呪文を唱える。
「青き水の刃よ、今一度我が手に」
すると、青い龍のペンダントが水の塊となり、抜き身の剣を形作る。これがこの剣の秘密である。このペンダントは魔力が形作って存在し、それを瞬時に武器へと変化させることができるのだ。僕はそれを握り、傭兵崩れの男と対峙する。
「魔法でできた剣か。また珍しい。高く売れそうだな」
男は感心しながら剣を抜く。

「奪えるものならですけどね」
「では、そうしよう」
その言葉を皮切りに男は突っかかってきた。僕はそれを左に避ける。すると、男は向きを変えて追い討ちをかけてくる。僕は飛びのいてかわす。
「どうした、逃げているだけでは勝てんぞ」
そんなことは言われるまでもなく分かっている。既にどう「対処」するかは考え済みだ。
「ミスト！」
その言葉に応えて、ミストは霧状化し、周囲は霧に包まれる。
「なるほど、霧にまぎれて攻撃するつもりか。そう簡単に上手くいくと思うなよ」
そして、彼は剣をじっと構えて集中した。こちらの攻撃に備えるために。その行動は間違っていないだろう。仮にこちらが攻撃を加えるとすれば、だが。
僕らは集中している男を擦りぬけて、遠くに去っていくのだった。

「先が長いのに、わざわざ戦って疲れたいと思うもんか」
「……まぁ、な」
ウィンが呆れる一方で、僕は機嫌よく逃げていくのだった。

「有り金、全部いただくぜ」
崖に挟まれた道を進んでいると、突如岩陰に隠れていた山賊が現れた。まぁ、よくあることだ。
「謹んで、お断りさせていただきます」
ぺこり、とお辞儀する僕。まぁ、当然そんなことを言っても許してくれる訳ないはずで。
「じゃあ、死ね！」
前後左右から一味が襲いかかって来る。
「よし、裕也！　応戦だ！　バトルだ！」

「謹んでお断りさせていただきます」
だって、面倒なのは嫌だし。
「ウィン、空に逃げるよ」
「へいへい」
ウィンは渋々ながらも空に飛び上がり、僕はミストを水の魔法石に戻した後、その足にぶら下がった。
「誰が逃がすか」
そう言って何人かの山賊が矢を射ようとする。僕は風の呪文を唱えてけん制し、ウィンに左側の崖の上に逃げ込ませた。そして正面に現れる数人の男。
「残念だったな。上に誰もいないと思って……」
僕は着地と共にウィンを風と変え、その風の一部を剣に纏わせて斬撃で飛ばす。油断していた相手に直撃する。
「不意打ちとは卑怯な！」
いや、それは山賊のセリフじゃないだろ、というツッコミは置いておこう。僕は相手が怯んでいるうちに僕は右へと向きを変えて走り出す。
「貴様、挙句の果てに逃げるのか」
当然追いかけてくる山賊達。もちろん崖の下の奴らも退路を塞ごうとする。
「悪いけど、そっちの都合は無視させてもらうよ」
僕は再度風を前方の崖に目掛けて飛ばす。その風は岩盤を切り刻み、岩が崩れ落ちる。そして、ウィンを鷹の形態へと戻して、崖崩れの奥の山道へと飛んでゆく。
「では、失礼します」
そう言って僕はそのまま去っていった。
飛ぶ手段がない山賊達は崖の下は崖崩れで道がふさがれ、上からは降りるのに時間が掛かり、追いつくことはできなかったのだった。
「なぁ、あんなに崩して大丈夫なのか」

「他に山道があるし問題ないよ、きっと」
深いことは考えても仕方がないだろう。まぁ、命が懸っていたんだから良いよね、たぶん。

意気揚々と進む裕也達の後ろに忍び寄る一つの人影。
「あれが、例の奴だな。大したことはなさそうだな」
そう呟いていると、背後から怒鳴り声が響く。
「貴様、何者だ！　まぁ、いい。身ぐるみ置いて……」
その刹那、風が山賊の首が切断をした。
「どうやら、先に掃除をしないといけないようだな」

## ep1－3（前書き）

やはり裕也は今回も逃げます。追うものと追われるものと。

## ep1－3

その後もミストやウィンの能力を使って僕達は逃げていくのだった。
「……まだ、まともに戦闘してないぞ」
「目指せ、戦闘回避百パーセント」
できるなら戦いなんてせずに済ましたいのが本音。というより、こんなところでまともに戦っていたらもたない。今でこの山の三分のニほど過ぎたところだけど、既に十数回程追剥と遭遇している。下手に戦って疲れるよりも、楽に済ませたい。この一帯の盗賊退治の依頼を受けたなら別だけど。受ける気はないけど。
「あー、もうイライラするぜ」
とはいえ、研究所で着いてから少しぐらい退治しようか。こいつのストレス発散のために。
「ボクは逃げるだけで十分刺激があって楽しいけどな」
「戦闘好きだからね……」
戦いが本能の一部なんだろうな。精霊獣ではそういうのも多いらしいけど。
「そこのガキ、荷物を置いてけや」
僕らが雑談していると、また一人、追剥が現れた。面倒くさそうなのを隠さずに僕は剣を出現させる。
「ミスト、ウィン行くよ」
その言葉に反応し、二人は臨戦態勢に入る。
「精霊獣使いか、そんな貧弱なのは俺の敵じゃねぇな」
図体がでかい山賊は斧を持ちながらニヤニヤ笑う。
「確かにあなたの敵じゃないかもしれないかな」
だってこちらは戦う気がない訳だから。
「それは素直な心がけだな。何、命まで取らねぇよ」
機嫌よく返事をする山賊。その機嫌も僕の返事ですぐに悪くなる

だろうけど。
「でも、荷物を置いていくのは嫌なので、どうぞかかってきて下さい」
「馬鹿な選択をしたな。そんなひょろい体で勝てるとでも思ってんのか！」
案の定怒った山賊は斧を振り上げてこちらにやってくる。それと共にミストは霧となり、視界が悪くなる。
僕はいつも通り山賊の横を擦り抜け、そして、そのちょうど山賊の右後ろ辺りで、右に体を向けながら、後ろへと飛びのいたのだった。
そして一陣の風が辺りに吹き荒れる。

「なんだこれは！」
山賊が切り刻まれる中、僕はミストを水と化して纏い、その威力を軽減した。
「防いだか」
言葉と共に大きな岩の陰から現れる不振な人物、顔は青いターバンで巻かれていて見えない。薄汚れた灰色の服装と相まって、危険そうな印象しか受けない。
後ずさりして、相手との距離を置きながら、僕はその人物に質問を投げかける。
「誰、と聞いても答えてくれませんよね？」
「無論な」
奴は僕の質問に間髪入れず返事し、じりじりとこちらに近づいてくる。
「じゃあ、冥土の土産に目的ぐらいは教えてくれませんか？」
「魔法研究所の荷物、とだけ言っておこう」
それはまた面倒だな。ただの追剥ならば、標的は誰でもいいので遠くまで逃げれば助かるかもしれない。しかし、標的が荷物ということならばくれてやる気がない以上、しつこく折って来るのは間違

いない。
とりあえず、今はすべきことに集中するか。
「ウィン、風を巻き起こせ！」
「了解だ！」
ウィンは風を起こし、辺りは一体砂埃で見えにくくなる。更にミストが霧を発生させ、視界は最悪となる。これまでは、視界の悪さで奇襲を受けることもあったが、それを逆に利用した形となった。
そして、僕は記憶を頼りに奥の道へと走り出す。
「やはり逃げるか」
青ターバンの男は呪文を唱え、強力な風が音を立てて砂埃、水蒸気を共に吹き飛ばす。
そして、こちらを追うと共にナイフをこちらに投げつけて牽制してくる。僕はウィンに命じて風を起こさせ、その勢いを弱め、ナイフは地面へと落ちる。
「ウィン、適当にどこか逃げ込めそうな場所に誘導しろ！」
ウィンはバサバサと羽音を立てて飛んでいき、視界から消えていく。 ウィンが戻って来るか、それとも奴に追いつかれるかどちらが先になるかな。

なんとか岩を避けて、必死に逃げる僕。その後ろには、軽々と移動しながら、こちらに来る青ターバンの男。
現在、敵との距離はまだある。先に走り出した分と、奴が呪文を唱えた時間の分、猶予はある。が、いずれ追いつかれる可能性は十分にある。ましてや、山賊とかが現れたら逃げ切れないだろう。
「チッ、逃げ足の速い奴だ」
再度ナイフが投げられる。対してミストは僕の肩に乗り、ナイフの方に水を押し出す。ナイフは勢いを失う。
「ならば、これはどうだ」
奴は走りながら風の呪文を唱えた。その風はミストの水では防ぎきれず、弱まりながらも僕達を切り刻む。

「裕也、大丈夫？」
よろめいた僕にミストとの心配そうに聞いてくる。
「問題ないさ」
僕は元気よく答え、体勢を立て直して走り出した。　しかし、奴はすぐ後ろまで来ていた。
「終わりだ」
この距離ではナイフを投げつけられれば回避することは無理だ。戦うしかないか。
「裕也。こっちだ！」
そのとき、前方を飛んでいたウィンが戻ってくる。
「逃げられると思うな」
青ターバンの男は再度呪文を唱えようとする。
「そうはさせるか」
ミストは球状の水を発生させ、それを相手にぶつけた。それにより詠唱が中断される。
「ナイス、ミスト！」
僕はミストを魔法石に戻して、ウィンにつかまり、そのままウィンは上空へと飛んでいく。
「くそ」
ターバンで顔は見えないが、いらつく様子が窺える
「裕也、もうすぐだぜ」
次第に崖が見えてくる。少し遠回りするだろうが、あそこをウィンで飛んで着地すれば逃げ切れるだろう。僕達はその崖を降りていった。
「くそ、逃がすか」
青ターバンの男は崖の上から風の呪文を放ってくる。しかし、ウィンはその攻撃をなんなくかわしていった。
崖の下に降りてからは山賊とかの追剥にはあったが、今のところ、青ターバンの男とはあわずに済んでいる。

遠回りをすることになったこともあり、日が暮れていく。僕らはそこらを探して、ちょっとした洞窟で夜を過ごすことにした。
「はぁ、結局一晩過ごすことになったか」
溜め息を吐く僕に対して、ミストがフォローを入れてくれる。
「仕方ないよ。いきなりあんなのが襲ってきたら、無理に戦うのをやめておいた方が無難だし」
「それにしても、奴の狙いの預かり物は何なんだろうな」
ウィンが声を荒げて話す。
「まさか、あの研究員に何か厄介な物を押しつけられたんじゃないのか」
僕は首を横に振る。
「それはないと思うよ。機密のある物にしろ、危険な物にしろ、会ってすぐの人にそんな物を渡すとは思えない。とりあえず、届け先で確認するとしようよ」
そう言って僕は寝始めた。おそらく明日対峙することになる敵を浮かべながら。

## ep1－3（後書き）

後1話でep1は終了の予定。

## ep1－4（前書き）

これでep1終了。すみません、結局3ヶ月と少しかかりました……。

## ep1－4

日が昇り、僕達は再び研究所を目指す。
「さてと、奴は出てくるかな」
「さぁね。正面からくるにせよ、奇襲をかけてくるにせよ、仕掛けてくるには間違いないだろうよ」
この近くで人が住むような場所はレクス研究所しか聞いたことがない。と、すれば、そこへの道のりで待ち伏せすれば、遭遇できると考えるだろう。
「どうする裕也？　遠回りをして後ろから行くこともできると思うけど？」
「うん、それが一番素直かなと思うんだけど」
その作戦には一つ問題がある。
「そうすると、下手すればもう一回野宿しかねない」
そうなれば、学校に遅刻することは確定だ。連絡もなしにそんなことをすれば面倒なことになるのは間違いない。うん、とても私的なことなのは分かっているけど。
「じゃあ、正面突破する、っていうことだね」
「そうするしかないかな」

僕達は今、山道の出口へと近づいていた。山道を出ると、盆地が広がっているらしく、そこに研究所がある。
研究所に着いて荷物を渡せば、この依頼はそれで終わり。ついでに、機密情報でなければ、この魔法玉にどのような魔法がかかっているかぐらいは確認してもいいだろう。これがつけ狙われ、苦労して届けているのだから、どのようなものか気にもなる。単に研究所からの物品なので、価値のあるものと考えて狙ったというところだろうが。いずれにせよ、この依頼もあと少しで達成となる。
さてと、では最後の関門を突破するとしようか。

「えーと、青ターバンの不審者さん、出てきてくれませんか」
当然の如く返事は返って来ず、沈黙が広がる。
僕が来た方向で、研究所へとたどり着くのは、この道しかない。
また、僕が回り道をするかも分からない。そうである以上、無理に探すよりは、ここで待ち伏せする方が良いと判断すると踏んでいるのだが。
「まぁ、わざわざ有利な地形を破棄するはずもないか」
ばれているからといって出てくる相手でもないよな。
ミストが横から話しかけてくる。
「裕也、どうする？」
「しらみつぶしに探している方が、ありがたいんだけど」
それなら遭わずに済みそうだから。けど、
「いる前提で考えたほうがいいだろうな」
「そうだね」
ウィンの言葉に僕は頷く。いなければ杞憂で済むが、逆にいるのに想定していなければ不意打ちをくらう。
「じゃ、全速力で駆け抜けるとしようか」
「了解だ」
「ん、分かった」
僕は了解が取れたのを確認し、大声で合図を出す。
「じゃ、“いつも通り”いくとするよ！」
その言葉を皮切りに僕は走り出した。ミストは僕の少し前を走り、ウィンは上から見渡せるように空へと飛ぶ。
周囲には少し両側が高くなっている以外は他の場所と変わらず、辺りには身を隠せるような岩がいくつもある。どっから来るなんて分からない。
どの岩から攻撃が来るか、それが問題だ。それさえ分かればどうにでもできる。僕達は辺り岩に注意を払った。
そして、風を纏ったナイフが右から飛来する。
僕は慌てて水になったミストを纏い、少しでも威力を軽減する。

ナイフに右足を切りつけられるも、十分立っていられるぐらいだ。
そして、ちょうど上空からも死角となるような岩から青ターバンの男がナイフを両手にして、こちらへと切りかかってくる。僕はそれが目に入った瞬間、体を捻る。
そして、すぐさま剣を横に振り抜く。

「何！」
相手は僕がよけるとばかり考えていたため、不意打ちとなり、右腕からそのまま一撃を受ける。今回、水の剣は刃の部分は鋭くしていないが、相当な威力となったはずだ。相手のナイフはその勢いで飛んでゆく。
「上手くいったな」
ウィンがそう言って降りてくる。
相手は今まで逃げてばかりの僕をイメージしている。足の速さや剣の速度は熟知していただろうが、反撃が来るとは想定しづらかったはずだ。それに、たとえ想定しても、心の中でわずかな油断が生じるだろう。
ましてや、見せていたものより、剣の速度がいつも以上に速ければ防げないのが道理。
「まさか、今まで手を抜いていたのか」
僕は丁寧口調ではなく、タメ口で相手に返答する。
「一応、こんなこともあるかも、と思ってね」
奴は歯軋りしながらも、更に尋ねてくる。
「では、逃げ続けていたのも、この時のために？」
「そちらは、ノー。僕の任務は贈り物を届けることで、賊を退治することではない。だから、先が長く何があるのかも分からないのに、戦い続けるのは危険と判断しただけだよ」
だけど、今は違う。ここは最終地点で、こいつはこの依頼を達成するのに避けては通れない敵。
だから、今こそ戦う。

「まぁ、いい。今の一撃で優位に立ったと思うな」
奴はマントからナイフを取り出して構える。
「甘く見ないさ。油断は命取り、というのが定番だから」
僕は剣を構えて、水属性の回復呪文を唱える。すると、癒しの水が切られた足の傷を一時的に塞いでくれた。
ウィンは空へと飛び上がり、ミストは僕の横で控える。

「消えろ！」
奴はまず上空へと風の呪文を放った。ウィンを狙ったものである。ウィンは悠々とそれをかわす。
青ターバンの男が呪文を唱えた隙に、僕は切りかかろうとする。奴はそれを予見していたように、すぐさまそれを後ろに跳び退く。だが、僕の剣は振り下ろされず、左に倒し、前へと踏み出し、右へと振り抜く。
「くっ」
相手が痛みを堪えきれず、呻き声を発する。
「もう一撃だ」
僕はよろけた相手に追撃をかける。だが、そう上手くはいかず、左に避けられて、同時にナイフが僕とミストに投げつけられる。ミストは水上へと流し出して作り、ナイフは威力を弱める。
だが、その瞬間、奴はナイフを持って切りかかってくる。そこで、ウィンが上空から急降下し、その勢いで敵を切りつける。
そこで僕は、一旦距離を取る。
「間合いを取ったか」
奴は改めて僕に視線を向ける。そこにはミストはもちろん、ウィンもいた。
「一気に決着とさせてもらおうか。ウィン、いいね」
「ああ」
ウィンは風となり、僕の剣に纏わりつく。
それを見た相手も風の呪文でナイフに風を纏わせる。

「いくぞ」
相手がこちらを目がけて駆けてくる。僕もそれに応じて、駆け出す。そして、互いの距離が近まり、あと少しで僕の剣の範囲内となる。敵はそこで更に加速する。こちらより早く一撃を加えるために。一方の僕は――剣を振ろうとしなかった。
そして、いきなりミストが霧と化し相手の視界を奪う。
「何っ」
相手は驚きながら、がむしゃらに前へとナイフを振り切った。だが、僕はそのとき右へと飛び退いており、奴の攻撃は空を切る。そして、僕は横から風を纏った一撃を加える。そして、相手は吹っ飛び、岩へとぶつかり、気絶したのだった。
「ふー、何とか終わったか」

僕はその後、相手の手当てと捕縛を済ませて、研究所へと連れて行った。後の対処は向こうに任せるとしよう。
そして、依頼を果たしにリーサ研究員へと会いに行く。
「これをタリスさんからの依頼で持ってきました」
「ええ、ありがとうございます、大変だったでしょう、この辺り治安が悪いから」
本当に大変でした、という言葉は飲み込み、適当な返事をする。うん、時に本音は黙っておくべきものだろう。
「ところで、その魔法玉ですが」
仮にも研究所の道具だ。見ておく価値はあるだろう。それに、もし機密ものだったら――絶対追加請求してやる。あの青ターバンの男程度だったらまだしも、もっとやばい奴らに狙われた可能性だってあるのだから。
「では、こちらに来ていただけませんか」
そう言ってリーサ研究員は奥の方へと歩き出した。僕はその言葉に従って付いていく。
そして、ある部屋へと入る。そこには庭が広がっていた。リーサ

研究員はそこに魔法玉を埋めて、呪文を唱える。すると、魔法が開放され、無数の芽が出た。
「この場所では、少ない養分で成長を促進する呪文を研究しているのです。この辺りは見ての通りの荒地ですから」
なるほど、と僕は相槌を打つ。この一帯は不毛な土地だから、豊かにするにはその手の呪文が必要だ。
「タリス研究員も協力して下さっていましてね。まだ研究段階だから、狙われる可能性は低いと思っていたのですが」
「まぁ、研究所からの依頼だったので、これぐらいなら覚悟してましから、大丈夫です」
本当は少し慌てていたけど。
でも、研究段階の上、強力な呪文というほどではない以上、あの男の行動は偶然と見なせるぐらいか。武器に転用しづらいし、それに未完成品だから、追加請求の必要はないな。
「それと、ゲートの使用許可は取ったので使って下さい」
「え、本当ですか、ありがとうございます」
よし、これでもう一度あの道を通らなくて済む。さてと、帰ってゆっくりするとしようか。

僕らは好意に甘えて、レクス研究所のゲートを使って、基地にしている小屋へと戻る。そこからライグスシティの魔法研究所へと向かい、タリスさんから報酬を受け取る。これで依頼は無事終了。
そして、もう一度小屋へと戻り、ゲートを通って家へと帰り、今回の旅を終えるのだった。
「ふー、じゃあゲームして遊ぶぞ」
「裕也、俺も混ぜろよ」
僕らはお菓子を広げて机に置き、ゲームをしてゆっくり過ごす。仕事の後の休息は何と楽しいものなのだろうか。
でも、何か忘れているような……。

「裕也、宿題しなくてもいいのかなぁ。たくさん出されているって言っていたけど」

翌日僕が叱られたのは言うまでもない。

## ep1－4（後書き）

ｅｐ2はおそらく9月頃投稿開始。それまでにｓｓは書くかもしれませんが。

## ｅｐ2好奇心は猫を殺す？－１（前書き）

三か月ぶりの更新になります。一応９、１０月中にはｅｐ2を終わらせる予定になります。

## ep2好奇心は猫を殺す？ー1

とある月曜日の昼の授業。僕、響裕也はいつも通り授業中に寝ようとしていた。僕を起こそうとする悪魔の囁きは無視して。

僕はこの世界といくつかの異世界を行き来する旅人――これを僕らはゲートトラベラーと呼ぶ――である。だが、その一方でこちらでは未だ高校生であり、そのため旅は長期を除き、土日しかできないような小さなものが普通だ。しかも日曜日に帰るのが遅くなれば、翌日が大変な訳で。

だから、今ここで寝ているのも正統な理由があるのだ、と心の中で言い訳しておく。

「先生、響君が起きません」

先ほどから僕を起こそうとしていた右隣の席の女子が先生にそう言った。その声に反応して先生のはぁという呆れ声が聞こえてくる。

先生に気付かれた以上、教科書にうつ伏せになっているだけ、と言い訳をするか。

「なので、起こすためハンマーを振り下ろしてもいいでしょうか」

「そこ、ちょっと待て！」

慌てて飛び起きる僕。

「僕を殺す気か」

それにあっけらかんと答える少女。

「大丈夫。とある学校ではハンマーを振り下ろしても寝続けた生徒がいる――と面白いなと思う」

「願望系だろうが！」

「響も起きたし授業を再開するぞ」

先生、今さっきの衝撃発言に対する注意はないのですか？　ハンマーなんかを振り下ろされれば死ぬと思うんですが。

「そりゃ、ハンマーを振り下ろそうとするなんて、冗談だと持って

誰も信じてないよ」
こら、そこ人の思考を読むな。
起こされた僕は授業に渋々参加するのであった。かすかに残る眠気に耐えながら。

「とりあえず、言い訳を聞こうか」
僕は廊下で、茶色の髪を後ろに垂らして青色のリボンで括っている少女――望月瑠奈――に詰問する。例の右隣の席の少女である。
「お前は知っているだろ、僕がなんで寝ているのか。というか、そもそもお前はわざわざ起こすような殊勝な生徒でもないだろ」
瑠奈は苦笑しながら返事を返す。
「うん、知っているよ。昨日一昨日と異世界で依頼を受けていただろうということも分かるし。でも、だからって寝てもいいということにはならないと思わない？」
それはそうだろうけど。でも、僕はこいつがそんな正義心から起こしたのではないと断言できる。
「だから、起こした時の裕也の反応で楽しめたら、じゃなくて裕也が今後の勉強で困らないように、と」
「いや、その訂正は無意味だから。既に本音が出ているから」
「まさか、私の心の中が読めるなんて。ああ、裕也はなんとエスパーだった！」
わざとらしく大げさに驚く瑠奈。きっと僕をからかって遊んでいるのだろう。
「あー、そう言う茶番はもういいので。ところでハンマーについてなんだけど、本当は持っていないよね？」
「うん、持ってきてない」
「そりゃ、そうだよね……」
明るく宣言する瑠奈に対して、僕はげんなりとして返事する。普通、ハンマーを携帯するような女子高生がいるはずもないし、あれは僕を起こすための一芝居だったのだろう。

「地属性の魔法で鉄の強度になっている程度の木槌しかないよ」
「なんで、そんなものを持っているんだよ！」
ああ、そういえばこいつは普通じゃなかったんだった。
「えーと、いざというときの暇つぶし用？」
「良く分かった、この一連の流れを見越してだね」
暇つぶしでそんなもの持ってくるのにそれ以上の理由が見当たらない。
「とりあえず、二度とそんな危険物を持ってくんな。というか人で遊ぶな」
「裕也が困っているなら仕方ないかな。うん、気が向いたらちゃんと止めるよ」
たぶん、これ以上言っても無駄なんだろうなと思う。
「じゃあ、そろそろ授業も始まるし先に教室に戻っているね」
そう言って教室へと向かう。
「それはいいんだけど」
まだ何か言うことがあるんだろうか。
「さっきの授業中にミストが魔法石から出て、外に出ていったんだけど、大丈夫？」
「先にそういうことを言え！」
ああ、どうして僕の周りは問題起こす奴だらけなんだ。人で遊ぶ少女に、契約者に黙って勝手に動き回る精霊獣に。
「先生に保健室寄っているって言っといて！　理由は任せた」
そう言って僕は走り出す。
「どう頑張っても信じてもらえないと思うのは、私だけ？」
そんな瑠奈の呟きは焦る僕には聞こえなかった。

「あの、猫どこにいるんだ」
僕はいらつきながら、校内を探していく。もちろん先生に見つからないように注意しながら。
精霊獣は魔力を有さない人には見えない。だから、こちらの世界

で見える人なんてそんなにいないんだけど。だけど、仮にこの学校の知らない誰かがそうで、たまたまそいつが出歩いていて、面倒事に巻き込まれることもありえる。
そんなのお断りだ。
適当に付近を捜し回るが見つからない。このまま校内を探し周るのは時間がかかるし、時間をかけると先生に見つかりかねない。なら、見晴らしの良いところから探すのが良いだろう。
僕は一旦校庭に出て外にいないかを確認することにした。この時間は外で体育がないのでちょうど良い。
「えーと、どこだ」
一先ず校庭をざっと見渡してみるが、確認できない。次はあいつがよくいる窓際を確認する。そこにもいない。仕方がないので、中庭の方へと向かった。
すると、建物の隙間に奴はいた。ちょこんと座って尻尾を手前の方に垂らしていた。
「おい、ミスト」
僕は誰かに聞かれないように小さく呼びかける。すると、ミストはすんなりこちらの方を向く。
「あれ、裕也。授業は大丈夫なの？」
「大丈夫じゃない。けど、お前が外に出ているって瑠奈から聞いたから探しに来たんだよ」
すると、ミストはげんなりした顔をする。
「裕也は心配性だなぁ。この時間に出歩いている生徒はいないじゃん」
「先生、トイレ、教室移動、色々可能性があるだろ。察しろ」
そう言って、僕はポケットから青色の魔法石を取り出す。
「とりあえず、早く戻れ」
「いいけど、その前にこれを」
そう言ってミストは一枚のチラシをくわえて僕に見せるのであった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4262r/

響裕也の幻想物語

2011年9月20日03時24分発行